



5人に1人が認知症患者になる社会が間もなく到来する。予防や治療に関する知識はもちろん、認知症になった時の本人や家族の心構えを事前に学ぶことはますます重要になるだろう。

だが、認知症への理解が進んでいるとはいえない。認知症の人と家族の会(京都市上京区)が先日、認知症の恐

認知症と想像力

れがある75歳以上の自動車運転免許保有を規制する改正道交法について、社会的支援の充実を国に求める声明を発表した。記事に「認知症をひとくりにして免許を取り上げる手法には不満の声もあり、認知症の高齢者に寄り添ったきめ細かな施策が必要」と書いた。

多さに驚いた。中でも、「飲酒運転で免許停止となるのと同じ」「どうせ免許を取り上げられたことも忘れてしまふ」といった投稿には憤りを禁じ得なかった。声明は、事故の危険がある重大性を十分に認識した上で、地方では免許の返上により生活が成り立たなくなる可能性があることから、個人の能力に応じた評価制度の整備や車に代わる移動手段の確保などを求めている。

える疾患があるが、すべての患者が運転能力を失っているとは限らない。意識を消失させる可能性があるのは認知症だけでなく、糖尿病などもそうだ。認知症だけのことさらに規制対象にするのが正しいのかどうかは疑問だ。

認知症の人もそうでない人も安心して暮らせる社会をつくるためにも、普段から認知症の人たちの困難や家族の思いについて想像を巡らせる必要がある。認知症は誰もがかかり得るのだから。

(小野俊介)